宇野浩二全集

第一卷

宇野浩二全集

第一卷

宇野浩二全集　第一卷
定價一五〇〇圓
昭和四十七年四月十日印刷
昭和四十七年四月二十日發行
著者　宇野浩二
發行者　山越豐
印刷者　白井倉之助
發行所　中央公論社
東京都中央區京橋二―一
電話（五六一）五九二一
振替東京三四
©一九七二　檢印廢止

宇野浩二全集　第一卷

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co

目次

清二郎　夢見る子
著者自からの序　人形になりゆくひと　醜き女が物語　ある雨の夜　ガラス寫しの寫眞　うた　天王寺の南門　西の棧敷に　玩具の錨　清二郎彼自らの話　細目の格子　蝙蝠飛ぶタ　掘割の誘惑　櫛を抱いて　人形とすご六　與力の心　悲しき祖母の寢物語　古都と　冥加知らぬ人の榮華　その父と未だ見ぬ從兄　伯父の小唄　友禪の座蒲團　五三
屋根裏の法學士　六一
藏の中　九二
苦の世界

長い戀仲　二八二
耕右衞門の改名　三一〇
轉々　三三六
人心　三六五
あの頃の事　四一二
因縁事　四三五
美女　四五七
あとがき　四七一

小說 一

清二郎 夢見る子

この小さき話の中に語られたるそれらの人々とさうして彼の日の小さき清二郎そのひとにまでこの小さき草紙はある最後の贈物として著者に依つて親しくさゝげられる。

著者自からの序

私は恥ぢなければならない。

それを知りながら、私はこの小さい草紙を活字にしようと思ふ。それについては何から先に云つていゝのか、私は色々の事をいひたい、その順序として、私は先づその成り立ちから話したいと思ふ。

それは一昨年の秋の頃だつたと記憶して居る。私ら——私の二人の友達と私と——がある所で寢ころびながら雜談をして居た時、ふとその中の誰だつたかゞ、何かの話のついでに次の様なことを云つた。

『一つ追憶風のものばかりを材にして、小說とも小品ともつかない様なものを一ダズンばかり書いて見ようぢやないか』

『その邊が丁度似合つてるかも知れないな』と、M君がその時、ひやかす様な戲言の様な口調で答へた。

M君——さうだ。M君が例のお坊ちやんお坊ちやんした可愛い顏をして、さう云つたのを私は今思ひ出した。M君——その一二年前の可愛い少年であつたM君は、Tさんの口を借りていふと、『どゞ逸文句にある様な』世帶をもつて、今は頗る親爺さん顏になつて居ることを、私は特にこゝにつけ加へておきたい。

話が横に逸れたが、M君の言葉を思ひ出して、そのある所といふのも次いで思ひ浮べることが出來た。それはあの、私がその頃一年ばかり獨りで住んで居た雜司ケ谷の森の家に於てゞあつた。その家の緣側に佇つと、破れた庭の竹垣を通して、可成りに廣い茶畑が見られる。その私の家と、花もないその荒れた庭と、さうしてその茶畑とをとり圍んで、欅の並木が植はつて居た。それらのある欅の一本と他の一本との間に小さな門があつた。その可成り廣い中に小さな私の家が一つある。背後(うしろ)には杉の若林があつた。よき秋の午後なぞ、よくそれらの高い欅の梢から、雪の様に霜葉がハラ〳〵降つたのを、私は今明らかに思ひ浮べる事が出來る。

M君とさうして今一人はT君であつた。T君は去年の冬、彼の御國羽後に歸つたまゝ都に出て來ない人である。

所が三人はその時、追憶といふ樣な話から、少々センチメンタルになつて行つた。T君の故鄕は、可成り長い間、家と人とが深い雪の下に埋められてさうして生きねばならぬ樣な冬をもつ國であるといふ。又、M君の話に依ると、彼の生れの鄕なる武藏の大野は誠に憂愁の限りであると云ふ。

兎に角、さうして三人が三人の話をかき集めて、一つの本にまとめて見ようではないかと、話は定つたのである。もつとも怠け者であるといはれるT君も、彼が云ひ出した位ゐであるから是非怠らず書かうといふ事であつた。

三人は、そこで大いに書かうと約して別れた。

さうして、私もその頃、今形は變つて居るけれど、こゝに收められた一つ二つのものを書いたと覺えて居る。

M君も同じ頃、卽ち未だ熱のある頃、一つ半位ゐ書いたかと思ふ。彼の書いたそのある小品の原稿なぞは、ふと妙な機會からある女學校の小さい娘さんの手から手に渡つて、一時MさんMさんとひそかにもてはやされた事なぞは大出來の挿話であつた。さうしてT君は豫期された通り半分も書かなかつた。——その中に私らは冬を越して春を迎へた。

所が始めの中は時々それについての話も出たが、いつの間にか私らの中に忘られた樣にそれが語られなくなつた。さうして夏期休暇が來た。——それは去年のことである。

私らの中に、それについての話がされなくなつて、私も勿論忘れ勝ちであつたけれど、又時々は思ひ出してやつて見ようと氣を勵まして、また一つ位ゐ私ひとりは書いて見たこともあつた。

去年の夏、私が大阪へ歸つて來たのは二年ぶりであつた。私は物心ついてから、大阪を一ケ月も離れた記憶は、辛うじて持つ位ゐなのである。されば見ないこと二年ぶりに、こゝに歸つて來たら、大阪は今までとまるで違つた大阪になつた樣に、誠にはつきりと誠に美しくそれが私の眼に映つた。その時私は、この大阪を書かないまでも、是非心ある人に見せたいと、思つた。

その時の私には、大阪の人は誰も眞に大阪を知らないし、外から來た人の眼は新らしいけれど、同時に飛んでもない間違ひも多い、と一圖にそんな風に思はれて、何でも彼でも大阪を知つて居るのは自分ひとりの樣に力み返つたものである。

けれども、さうするにはあまりに私はドリーマーであるに過ぎる。

誠に私は、その清二郎の樣にドリーマーである。

頭腦の惡い私には、一晩に七つ八つから十二三も夢を見て、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

覺めてからもそれをはつきり覺えて居るといふことや、二日も三日も徹夜した翌日などに、机の前に座つて居て、覺えずコクリと居眠りをする、そのコクリとする間に、極めて筋の複雜な夢を見たりする點に於て、誠に私は大變な夢を見る人であるばかりではない。又、寢て居る間の自分の周圍に起つたことを夢の中に見て、覺めてから後も夢と實際とを混じて失策をしたりする樣な、そんな風の夢を見る人であるばかりではない。

私は私の過去の小さい生活を思ひ浮べる時、その何處までが眞實で、その何處からが私の夢であるかを判ずる事が出來ない。

さういふ私は、凡ての事實を夢と見ることが出來、凡ての夢を事實と見ることが出來る樣に思はれる。

さうして、去年の夏、私は二年ぶりにこの大阪の町とその掘割とさうしてその夜の灯を見、又私の宗右衛門町に、昔ながらの華やかにしめつぽい音樂と、それが不自然になつた迄柔らかく發達したこの町の言葉を聞いた。

その後私は又東京に歸つて、會ふ人毎に大阪の話をした。さうしては幾人かの初めての人をこの町にともなつて來ては、その初めての人は私の話から色々の幻像を彼らの心に畫きつゝ、この堀割の水の上に、この橋の上に停つた、さうして私は物足りなさうな顏をして居る數多のザイスイリユージョニストばかりを見なければならなかつた。

けれども私は僞をいうた覺えはない。けれどもそれは又、私にばかり眞實であり、私にばかり僞でない、要するにドリーマー私の夢であるのかも知れない。

私は、勿論、自ら之れを誇る意味でもなく自らそれを恥ぢる意味でもなく、斯ういふことをいふ事が出來る。——私はひるの日中に夜をみることが出來、夜の夜中にひるをみることが出來、男に女をみることが出來、女に男をみることが出來る。

けれども、夢はひとりで見られなければならぬ。

對象をもつて、ドリーマーは大いなるさうして苦しい負擔を感じなければならぬ。

ひるがへつて私は思ふ。うれしい私の友達は、彼らの聰明なる心々に、ドリーマー私の心を入れてくれて、さうして彼らは彼ら自らの眼に私の町（私の町と私は呼びたい）を見てくれた。彼らは彼らのある滿足をもつて、さうしては、去るにのぞんでかたい握手と共に濕ほひを帶びた親しい彼らの眼で、小さい私の眼を接吻けるのであつた。

ドリーマー私は、少年の樣な心に、殊に少年清二郎のもつた樣な心に、その時泣くのであつた。

兎に角、私は私のある故郷として、私のフアミリアーな所として大阪を報告する器ではないことを知つた。――去年の夏。

さうかうして居る中にも、夏は彼自らのなすべきことをなしつゝあつた。私は少しうろたへて來た。その頃、私は、朝、私の古い中學時代の友達と話をして居る夢などを見て居て、ふと急にその友達の聲が高くなつたのに夢から覺めると、現在自分の朝の枕邊にその人がニツコリ笑ひながら座つて居るのに驚かされては、何となき病にものうい床を起き出でる事が度々あつた。さうして終日引きかへ引きかへ訪ねて來る色々の客を相手にして、話し疲れてやつと夜の十二時頃に、一人になつた自分に返つては、この貧しい草紙の中に收められたものゝ大分を書いた。

私はこゝで、一昨年の秋、二人の友達と書かうと約束し合つた時その未だ熱のある頃二つ三つ書いたものと、その頃書いたものとは非常に變つた形式をもつて居るといふことを、些と云ひ挿んでおきたい。非常に形として、今見られる樣に、斷片的に短かくなつたのも一つである。從つてとられる材料も變つて居る。今覺えて居るのは、『美しく痴愚』の中の『玩具の錨』が、一昨年書かれた中の殘されたものゝ唯一つのものであるかと思ふ。又、去年の夏書かれたものも、その三分の一あまりは失はれたり、私の心で捨てられたりしたけれども、みんなさうしたら、この草紙の凡てを捨てなければならぬ事を私は知つて居る。

その頃少し前あたりから、追憶小品と銘うたれる樣なものが、文壇のある方面に起りつゝあつた。さうして不幸なことには、同じその頃から、私は何の理由もなしに追憶小品的なものに追々と厭氣の度が增しつゝあつた。勿論、一昨年私らの中に、追憶の風のものを書いて見ようと話され合つた時から、そもそもあまりそれに尊敬は拂はれて居なかつたけれど。さう思ひながらも、私はある時の熱でかられて、ほんに自分でも私の書くそれがあまり彼の高いものでなく、又追憶小品と云はれるにはそれがあまり上手なものでないことを承知しながら、丁度日本の子が、その兩親に對して負つて居る負擔の樣で、ズル〳〵と引きづられて離れ難ない、惡緣ともいへず、役目とも云へないあるものを感じながら、ある時は可成り熱心に、又ある時はだらけ切つた心持ちで、私はたゞ書いた。

私は早くその結着をつけて了はうと焦心つた。

さうして遂に私はその七分方を了へない中に、秋を見なければならなかつた。私は東京へ歸つて行つた。

私は文壇のある方面に、色々の若いひと達が、追憶小品と銘せられる數多のよい作を出して居られるのを見た。さうして勿論、同じ看板の下に、私のものが、同時に悲しい哉、あ

まりうまいものでないことを私自ら知つて居る。又、その背景たるこの町の案内記にもなり得ないことも知つて居る。けれども私はそれを恥ぢる前に、あのさもしい根性の商賣人の群が、『にせ物あり』と書かねばならぬ様に、わが親愛なる文壇にもさういふ事をしなければならぬ様なことが度々ある様に思はれる私には、誠に私の狹い胸に、私は私のその類のものを遲れて發表する元氣がなくなつたのであつた。

東京に、秋は次第に更けて行つた。私はもう決してこの小品をつゞける氣がなかつた。さうして時々その原稿を出しては、私はそこにひと夏の徒勞を見た。何となれば、もうそれを書いて居た時、去年、私は私のこの小さい仕事を恥ぢて居たのであつたのを、たゞ暗目滅法に出して了ひたかつたのである、丁度債鬼に攻めたてられて居るひとが、不義理に對して彼の眼を閉ぢてまで、ある日その負擔を一氣に逃れようとする様に。所がそれの殆んどならんとして出來なかつた私の去年のひと夏は、遂に功を一簣に缺いたわけである。

それらを書き了へた去年の夏から今年の夏、言ひ換ふれば今迄の過ぎた一年間は、私にまで色々な意味で又色々な方面で、誠に多事な日であつた、ある意味でそこにこそ初めて小さな私の生の序曲が聞かれた様に私には思へる、その様な日であつた。

（私はもう少し續けたいと思つたけれど、この邊に私の筆を擱かう。）

出來れば、それらの日のことを、私は更めて、清二郎ドリーマーが第二の前奏としてかきたいと思ふ。

兎に角こゝに、その結果が如何に恥ぢねばならぬかといふ事を豫め知りながら、大阪者の未練はこゝにも盡きないと見えて、私のこの古い原稿を箱の底から引き出すことになつた。さうして、去年の夏七分迄出來て居たといふ原稿を、その七分よりもつと少なくしてそれにほんの二つか三つ新らしく書き加へて、或ひは又紙數の都合によつては捨てた原稿を拾ひ集めて加へたり、さうして私は私のしたことを恥ぢなければならない。

私は賣文の苦しさを知つた。

終りに、私は、私が如何に見苦しく辯解の様な云ひわけの様なことを、こゝに書き過ぎたかを思ふ、思ひながら、さうした後私は初めてこの貧しく小さい草紙を、恐る恐るながらも出版するつもりになるのである。

この小さい集を出すに當つて、末筆ながら宇崎純一君の御好意を私は感謝したい、それから同じ様にそれについて骨を折つて下すつた田村菊次郎君、西村貞君、にこゝに簡單な私

の謝意をうけていたゞき度く思ふ。

齋藤寛君、鍋井克之君は御多忙の中を、この小さい草紙の爲に繪を寄せて下すつた、山本謹三君、市山萬治郎君は一層遲れねばならなかつたこの草紙の出版を、私のわがまゝを入れて早くして下すつた、私はそれらに對して誠に感謝の辭の足りないのを思ふばかりである。

千九百十三年、春、東都牛込の弊居にて

人形になりゆくひと

遠い昔の事やろか、或はひとに聞いたのか、夢に見たものか兎に角、

その人形はむかし、ひとであつたといふ。

極めて顏の美くしい、極めて姿の美くしい、その人形は又美くしい衣裳を着て居た。兎に角、

その人形はむかし、生きたるひとであつたといふ。而も美くしい女であつたといふ。

若かりしそのひとは、若かりし日のまゝに、美くしく美くしく姿かわらず老いたといふ。

けれどもある日から、そのひとは耳が聞えなくなつた。矢張りそのひとは、美くしく美くしく、姿かわらず老いていつたといふ。けれどもある日から、開いたまゝに目が見えなくなつた。

唇の色はありし日に變らなかつたけれども、遂にものをいはなくなつた。

やがて手がきかずなり、足がたゝなくなつた時、その日から、そのひとは人形になつたといふ。

お多福茶屋の人形は、夜となれば泣くといふけれど、その人形はつひに泣いたことがない。夫婦ぜんざいの人形は、夜となれば笑ふといふけれど、その人形はつひに笑うたことがない。

その時、清二郎はもう青年清二郎であつた。さうして人並に學問といふものゝ爲に、東京へ出て居る清二郎であつた。

ひと夏、一年半ぶりに歸省して、若い清二郎が老いても割合に姿かわらぬ母に會うた時、耳の遠くなつた彼女を見出した。

そろうた美しい齒をもちながら、清二郎は思ふ、母は年齒の數の少ない時からものを嚙みにくがつた。今は殆んど嚙めぬといふ。

目が段々かすむといふ。

母は人形になりゆくのではあるまいか？

清二郎は、さう思ふて、何となく悲しく、何となくなつかしく、又何となく憎らしい様な氣がした。

さうして、ふと、かの人形の話をしたのは、彼女ではなかつたかと思ふ。

醜き女が物語

夏、夕涼みの川舟に乘つて、道頓堀川を上り下る人ならば、必らず掌を合す事を忘れないだらう。——相合橋と太左衛門橋との間の北側の濱の柳の下に、小さき二體の夫婦地藏がたつて居る。むかしは夜になると、濱に小さな舟をしつらへて、戀の人々の、ひそかに參る爲にしたといふ。

今も尙涎掛だけは、新らしいの新らしいのと、重ねて掛けてあるけれど。

『相合橋から西むいて入水つたら、滅多に死に損ひはおまへんわ』

斯う云ふひとは、曲輪の心中話に詳しい、芝居茶屋の『紙屋』のおかみさんである。『紙屋』の座敷に座ると、夫婦地藏は川を越して向ひの岸に眞正面に見えた。

そのおかみさんは、若かりし日も五十幾つのその時も、醜い女であつたけれど、はなす話の面白さに、若い人々にもてはやされた。

ある夏の夜を、小さい清二郎もある物語の好きなねえさんに連れられて、わざと灯を消した『紙屋』の座敷に座つた事があつた。

二十年を、この濱に、自ら死んだ男をなごの詳しい話の一部を、小さい清二郎はねえさんの膝に倚りながら、瞬きもせずに聞いた。

向ひ側のおちやおちやの灯と、掘割をゆく涼み舟の青赤の灯が、暗い水に搖れて居た。

その時おかみは黑い顏をつき出して、

五人迄、あの濱の石段をトボ〳〵と降りて來て、あの柳の下にたゝずんで、申し合した様に皆手を合して、水にはいつた様を、この目に見たといふ。

その中の二人は、昔あつた人々の様に、戀ゆゑに、義理ゆゑに、相抱いて『死んだわいな』と、悲しい聲にいふ。目に見える様に、おかみは醜い顏をふりたてゝ詳しういふ。

あのおちやおちやの三味線の賑やかな下で、あの軒ばの紅提灯の明るい下で、あの障子障子にうつる舞姿の華

やかな下で、而もあの暗い川端柳の木蔭から、さうしてその多くは若い人々で、それらの人々が申し合した様に、手を合して身を投げるといふ事を、小さい清二郎は幼な心に、半ば恐ろしう、半ば懐しう思うて聞いた。

軒ば軒ばの紅提灯が小さく搖れて居た。

川端柳の枝々が、見えない程にふるへて居た。

掘割の水にうつる青赤の灯が、たましひの様にユラ〳〵と動いて居た。

ある雨の夜

雨がショボ〳〵降つて居た。

若い後家さんは泣いて居た。傘を一本さしかけた、そのひとに手をひかれて、小さい清二郎も泣いて居た。

夜の町のアトモスフイアを縫ふ、ほそい雨の寂しくも調うた調子と、濕つた土に浸み入る雨のしづくの斷絃の様な響を、さうして靜かな、いつそ絞められて默した様な曲輪の町に、灯だけ明るいおちやおちやの行燈の光が、濕つた道に、溜つた水に搖らめく色を、匂ひゆかしい母様の袖の下から、小さい清二郎はさぐゝりながら、聞いた、見た。

『何でお前はそんなん（そんな者）やろ』

一時間程前に、伯父はこわい顏して母様にいうた。

夫に別れた身を思へば、少し確かりしたひとならば、さうして身が大切、子が大切、家が大切と思ふなら、女子は女子だけのそれ相當の方針をたてねばならぬ。『それにお前は唯わが身だけの、而も女子のくせに、行き當りばつたりにやつて行くのやもの』

言葉少なに母は答へた。

伯父は常に默つて居るだけ、それだけ口數多くいふ。

『お前は自分ひとりのつもりか知らんけれど、子があるのを知らんのか？　家があるのを知らんのか？

『なるほど、お前ひとりのつもりなら、さうして居たら申し分ないやらう。貧乏して食へん様になる迄、お前は綺麗な着物着て、おいしいものを食べて行くつもりかいな』

『そんなら出て行きます』

最後に母は斯ういうて、自分の涙をふきながら、小さい子の涙をふきながら、何も持たずに、而も化粧だけ美しうして、着物だけ着かへて、傘を一本さしかけて、雨の町に夜を出た。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com